

施設広報紙部門 受賞作品一覧

受賞	施設名/広報紙名	審査員コメント
最優秀賞	軽費老人ホーム 青島荘（宮崎県） 『あおしま』	平成16年度優秀賞施設 余白、背景、太字、傾斜を生かしたレイアウトが洒落ている 紙面いっぱい写真を使う一方で余白を上手に残し、読みやすさに工夫が伺える 利用者の生き生きとした生活の様子が伝わってくる紙面
優秀賞	ハートホーム山口 デイサービスセンター（山口県） 『Heart News』	施設機能の紹介にとどまらず、ヘルスケアの情報誌として専門情報も満載している 「キャッチボール」というネーミングでアンケート調査を実施しており、コミュニケーション性が高い
優秀賞	社会福祉法人 福寿園（愛知県） 『ひまわり』	特集のソフト食メニューが食欲をそそる。見た目のよくない刻み食ではなく、ソフト食をよく工夫している 「福祉の絵手紙」は、入所者や利用者に限定せず広く公募した賞金つきの珍しいコンテスト 写真がきれいで掲載されている記事に興味を湧く
佳作	ケアハウス ハートピア石岡（茨城県） 『こころの楽園』	にぎやかで楽しい紙面づくりで、写真やイラストも躍動感がある 盛り沢山の内容で、読む人を飽きさせない フォントも大きめのものが使われており、読み手を意識した工夫もされている
佳作	特別養護老人ホーム あさひ園（熊本県） 『あさひ』	にぎやかでバランスの良い紙面づくりがされている 入所者個々にそれぞれの企画コーナーに登場してもらっており、ほのぼのとした雰囲気が出されている
企画賞	特別養護老人ホーム のぞみ園（鹿児島県） 『広報のぞみ』	ターミナルケアの重要性が叫ばれているなか、紙面を大きく割いて終末ケアを紹介。広報紙がほとんど取り上げていない最も身近な問題に正面から向き合っている ケアに対するやさしさが伝わってくる
審査員特別賞	特別養護老人ホーム 故郷の家（大阪府） 『こころの家族』	表紙の写真が象徴的である。一枚の写真が悲劇的な歴史と人生のドラマを語りかけてくるようだ 韓国からの研修生と在日一世のコントラストは、モノクロームでなければならない 隣国である韓国の福祉事情もわかる貴重な広報紙

施設広報紙部門 総評

産経新聞客員論説委員

岩淵 勝好

最優秀賞の『あおしま』（青島荘/宮崎県）は前回優秀賞だったが、余白、背景、太字、傾斜を生かしたレイアウトは公的な施設には珍しく洒落ている。何より題字がいい。今回は日高ワキさん（92）の力作。表紙の体操写真は、高齢者の楽しそうな表情にリーダーのダブルVサインを後からアップで組み込む大胆なアングル。楕円形の写真に斜めの目次を組み合わせたレイアウトも凝っている。特集の「介護予防座談会」もタイムリーで、入所者はもとより地域の介護予防教室参加者も発言している。ただし、白抜き文字にしたため背景が暗くなったことと、コメントが褒め言葉オンリーだったことが惜まれる。「家族リレー」は入所者と家族の手紙のやりとりという趣向が新鮮で、色とりどりの風船を使ったメルヘンチックなレイアウトもほほえましい。しかし、ここでも感謝、感謝のオンパレード。コメントをそのまま掲載したに違いないが、読者参加の問題点として、賛美調に対する飽食感が残る。あらかじめ課題の指摘を求めているので少し塩味を加えると甘さが引き立つ。なお、ピアカウンセリングについては、ピアカウンセリングとの違いを説明してほしかった。

優秀賞の『ハートニュース』（ハートホーム山口/山口県）は全国ヘルスケア情報誌コンクールでも優秀賞を獲得したように、広報紙というより情報誌である。認知症診断テスト、「ぼけてたまるか」など、医療、介護、健康、生活面の情報が豊富で、わが身に置き換えて考えさせられる。あんしんハウスから保育園まで幅広いサービスを提供していることから、総花的な印象を避けるには専門的な情報が有用といえよう。同時に、業務改善課を設置し、サービスに対する意見募集の無料はがきを広報紙に組み込んだ姿勢とアイデアはすばらしい。さらに「きゃっちぼーる」で、利用者の意見を紹介し回答している。20ページに及ぶスペースが可能にした双方向のコミュニケーションで、なかなか真似のできる紙面ではない。『ひまわり』（福寿園/愛知県）は、特集のソフト食メニューが食欲をそそる。平均要介護度4・3で、普通食を咀嚼、嚥下できない入所者が増えているため、見た目のよくない刻み食ではなく、ソフト食を工夫した。「福祉の絵手紙」も、入所者や利用者限定せず広く公募した賞金つきの珍しいコンテストである。

佳作の『こころの楽園』（ハートピア石岡/茨城県）は、にぎやかで楽しい紙面づくりで、写真やイラストも躍動感がある。『あさひ』（あさひ園/熊本県）もにぎやかでバランスの良い紙面が審査員に評価された。

企画賞の『のぞみ』（のぞみ園/鹿児島県）は、86歳の誕生日に亡くなった入所者を悼んでいる。広報紙がほとんど取り上げていない最も身近な問題に正面から向き合った。さまざまな角度から取り組めるテーマではないか。アルミ缶を集めて小学生が贈った車いすの話、「姉弟再会」「ふたりで201歳」もドラマ性がある。

特別賞は『こころの家族』（故郷の家/大阪府）。在日韓国・朝鮮人の老人ホーム「故郷の家」の活動、韓国総領事館主催のチャリティーコンサート、韓国の高齢者福祉政策の動向などを詳しく伝えている。表紙の写真が象徴的である。一枚の写真が悲劇的な歴史と人生のドラマを語りかけてくるようだ。くったくのない笑顔でVサインのポーズを決める韓国からの研修生、刻まれた皺と憂いを湛えた目に深い思いを込めて研修生の腕を抱きしめる在日一世。このコントラストはやはりモノクロームでなければならない。